恋のアフターケア
北条 遥
illustration
甲田 イリヤ

恋のアフターケア

《立読み版》

北条　遥

イラスト　甲田　イリヤ

「ああ…ん…もっと――イイ…」
ダブルベッドの広いシーツの海で僕―椎名夢積（しいな　むつみ）―は、スレンダーと評される白くスリムな身体をくねらせて快感の波を追いかける。与えられる快感を一つ残らず受け止めるために自由に手足を泳がせた。
「もっと、もっと深く…奥まで突いて。中、かき回して…めちゃくちゃにして。ねえお願い…」
この時だけは我を忘れて素直になれる。言いたいことをすべて吐き出すことができるんだ。
「…たくわがままばかりだな」
自分の素直な要求に腰を抱えている高元祐一（たかもと　ゆういち）課長が苦笑いを漏らしたのが分かった。内襞（ひだ）を微妙な振動が襲い、今までにない衝撃が背筋を駆け抜けた。
「あ…んっ！　イイ…」
（ま、そこが可愛（かわい）いところなんだよな）
きっと課長はそんなことを考えているんだろうな――なんて、快感の海に浮遊しながら僕は口元に苦笑を刻む課長を思い浮かべた。

ホテルの部屋に入るなり僕は噛(か)み付くようなキスを課長に仕掛けた。そしてきつく舌を絡めたまま性急に身に着けているものを剥ぎ取ると、課長をベッドに押し倒したんだ。

はしたないなんていわないでよね。もう限界だったんだから。

性急さを示すようにベッドの周りには二人が脱ぎ散らかした洋服が散らばっていた。

「…足りない、そんなんじゃ全然足りない…課長――」

うわごとのように呟(つぶや)きながら、一番いいポイントを突いてもらえるように自ら腰をくねらせる。

「……課長ね。ホント色気がないねぇ。こんなときぐらいは名前で呼んでほしいもんだ」

課長のつぶやきなんて快感を追うことに夢中になっている僕の耳には届かない。けれど自由気ままにふるまう自分のことを課長が好ましく思っていることを僕は知っている。そして自分の我がままな望みを叶えるべく抱えた腰に自分のペニスをねじ込んでくることも僕には分かっていた。

「ああ――っ…」

腰を激しくグラインドさせぎりぎりまで引き抜いたペニスで勢いをつけて突かれた瞬間、雷に打たれたような快感が背骨を伝って脳天まで駆け抜ける。

僕の脳裏に極彩色のタペストリ―が広がる。

幾重にも重なった鮮やかな色の洪水の中に精悍(せいかん)な顔がぼんやりと浮かびあがる。
でもそれは課長の顔じゃない。
自分を抱く男とは違う男の顔がはっきりと像を結んだ瞬間、僕はひときわ高い声を上げて背中を仰け反らせた。自然、突き出す形になった体型に見合った細いペニスから欲望の証が勢いよく迸(ほとばし)った。
「はぁ…はぁ」
「おいコラ椎名。自分ひとりだけ勝手にいくなよ…」
軽く頬を叩(たた)かれ、僕は息を乱したまま欲に潤んだ目を課長に向けた。
「課長…もう一回。もっと激しいの。で、次は一緒に――ね？」

「どうしたんだ椎名。今日は一段と凄(すご)かったな。持ってかれるかと思ったぞ」
煙草(たばこ)をふかす課長の胸に頭を預けたまま僕は頬を膨らませた。
「そりゃ激しくもなりますよ。だって二週間もほったらかされたんですからね」
「ほったらかしたって…人聞きの悪い」
「だって、本当のことじゃないですか」
「そりゃそうだけど仕方ないだろう。先週は嫁さんを送ってかなきゃならんかったんだから。それに預けっぱなしってのもまずいだろうよ」
課長の奥さんは今妊娠中で、クリスマスの頃には彼は初めての子どもの父親になる予定だ。バイセクシャルの課長は奥さんをこよなく愛している。
僕らは身体だけの割り切った関係でそれはどちらもが了承していることだった。
女性からも男性からも告白されることが多い僕だけれど、恋愛対象は男性限定。
これまで一人の人間と深く付き合ったことはない。だからといって性的に淡白というわけじゃあなく、むしろセックスは大好きなほうだ。
僕にとってのセックスはストレス発散のための必須アイテムなんだ。学生時代はとにかく面白くない

ことがあったときは誰彼かまわず身体を重ねた。故郷の母さんのことを考えて後腐れの無い相手とばかりではあったけれどね。

社会人となった今は仕事のストレスを吐き出す大事な行為になっている。

だから一週間でも会えないと僕の身体は切なくうずくのだ。

「なんで俺ばかり責められる？　割に合わないな」

課長の不満を軽く無視して、

「奥さんが帰ってくるのはいつ頃になりそうなんですか？」

シレッと聞いた。

「生まれたらすぐに年末だし、真冬の寒い時期にこっちで赤ん坊と二人っきりってのもかわいそうだからしばらく実家の世話になるとして…」

課長は煙草をくわえたまま指をおり、

「こっちに戻るのは来年の春になるだろうな」

と答えた。

「じゃあ、しばらくは独身貴族ってことですね―」

指を折った課長の手に軽くキスして僕は課長の顔を覗き込むと、課長は、
「まあな」
と満更(まんざら)でもない表情を浮かべた。
「なら今日は帰らなくても大丈夫なんですよね？」
わかっていることをあえて念押しする。
「ああ。今日はな」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

恋のアフターケア

《立読み版》

発行日　２０１１年１１月２５日
著者名　北条　遥
イラスト　甲田　イリヤ
発行所　【ＭＩＬＫ（ミルク）－ＣＲＯＷＮ（クラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Haruka Houjou 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。